

江戸時代旅行案内図 (天保版)  
大日本街道細見図

亀井学を大成した

### 大儒 亀井昭陽伝 (四) 庄野 寿人

- ・ 昭陽夫妻初正月
- ・ 亀井屋敷の旧観
- ・ 義弟・弟の修業旅行
- ・ 学問所・亀井家大火難
- ・ 昭陽等の平土組替え
- ・ 亀井家再々火難
- ・ 昭陽勤番士に就役

寛政八年(一七九五)、昭陽は廿四歳。新妻「いち」廿歳と初正月である。

昭陽は、書齋に安置する厨子の両扉を開き孔子像を正面に妻と座す。背後に帰省しない越年の内書生を列座させ共に聖像に拝礼する。終って用意の膳部に書生たちと一緒に就き、屠蘇酒を酌み、雑煮を食す。

昭陽は別室に移り、ひそかに父南冥に同様の献立を相伴した。父は寛政四年から藩命によって藩学西学問所主宰兼教授職を逐われ終身塾居(屋内に籠居し、他人との面接、外部との文通音信も絶つ)を科され、すでに四年を経過している。

幸いに亀井家は広く部屋数も多いので、南冥の動静は外部にうかがわれることなく、また塾生たちは別棟に起居する。正月は特別に母屋(おもや)の昭陽書齋を使った。

昭陽は自宅での正月行事を終える

と袴袴(かみしもとはかま)に着替え、近くの紅葉八幡、鳥飼宮、荒津山東照宮に詣で、城内の藩老久野、野村両家に年賀する。

この両家訪問は、父南冥が藩登用の恩遇を得て以来の慣習である。両家共に世代替りになっているが、久野家には後に再び昭陽に來宅講義を求められることになる。

正月六日、亀井塾は寄宿生に講義を始める。やがて藩学西学問所・甘棠館が開講すると、昭陽は塾講義を早朝に行い、終って朝食、その後藩校出勤する。時に授業または教務で午後には及ぶ時は、帰宅昼食して再出勤する。

さらに、夕食後、塾生の補修講義定日に全員会講を行う。

亀井家は、祖父聴因が明和元年(一七六四)唐人町に屋敷地を買い、祖父聴因と父南冥が医を営む。まもなく南冥の学塾を併設するが、どち

写真：杉山謙

能古博物館だより

からも繁盛し、とくに諸藩各地からの寄宿生が増加、このため学堂と寮舎を建増し、偉観を呈すると、安永四年(一七七五)に訪問した熊本藩儒・藪孤山の記録にされたことは、前号にも述べた。

現在も当時の亀井屋敷規模は昔の町並みが、そのまま残っている唐人町筋にうかがわれる。

また、後に福岡藩が亀井屋敷の隣地(武家屋敷)を立退かせて藩学西学問所・甘棠館を建設した規模も同様に、街区と道路が幸いに昔のままであることから明確に観察される。

以上で推察すると、亀井屋敷は約六〇〇坪、隣接する藩学問所は約八〇〇坪(二、六四〇㎡)。藩校と亀井家は僅かに一m程度の間隔、(多分、通路であろう)が見られ、この両施設を一区画として四面が道路である。現在は、すべて四面道路を表にする商家に建て変って各店が軒を接し、晝間は表通りに商品の張り出しが見られるほど大いに活況を呈している。

このため、市役所の「福岡藩西学問所跡」の石柱標識も適所に立てられず道路を挟んだ別場所に立っている。本来ならば「亀井南冥・昭陽住居跡」の標識も建てたいのであるが

遺憾ながらその場所を得ない。

この年、まず昭陽の義弟(妹婿)で藩西学問所教官の山口白賁が藩許を得て、京都修学に赴く。

白賁は、隣国肥前敵木(きゅうららぎ)村の医家に明和元年の出生で昭陽に九年の年長であるが妹婿のため一応義弟にされる。早くから、南冥の推薦で藩西学問所出仕として士分に登用されている。

現在、文庫に伝来する昭陽肖像は白賁の書賛である。

白賁に次いで、昭陽次弟の雲来(名は昇二郎、字は大壮、雲来は号である)も京洛修行に出る。

亀井家の当主である昭陽は、こうした縁故者の動行にも相当の気配りが必要で、妻「いち」も、兩人それぞれに出発前の壮行会等、物心の世話をしなければならぬ。

五月十三日、祖父の千秋翁十七年忌法要。縁故知己九一名の盛会。これも亀井家当主の責任行事である。

十月九日、妻実家の当主で兄「助八」が急逝する。実家「早船氏」の系累は、長姉が唐人町の「橋本屋」上原太右衛門妻、次が助八、次姉は姪浜「紙屋」石橋太郎次の妻、末女が昭陽妻「いち」となる。父母は健在であるが、既に同家の離れ家(甘

古堂)に隠居、このため父の正朔翁は再び家業に戻ることになる。

この年、昭陽に著述の成稿はない。家事要件に追われたのであろう。

明けて、寛政九年冬、昭陽著「月窟沙筆・二卷」成る。

書名の「月窟」は、昭陽十七歳で与えられた二畳敷の小部屋に、自ら付けた居室号で、月界の小洞窟の意。従って、この小洞穴での草稿を意にした表題であろうか。すでに五年前『月窟謾草』とした作品があり、同書の補筆にしたものか。謾草の書は現在不明である。沙筆は未刊、荒れた写本を手にしたが、文庫収蔵にしている。年末、昭陽末弟の大年(名は萬三郎、号天地房、大年は字)が、医療修業のため熊本藩医の村井家に出発する。

寛政十年(一七九八)二月朔日、唐人町近隣から出火。西風強く、たちまち大火となり、亀井家、藩西学問所は共に火元に近く、亀井家塾は若い書生達も身一つ辛うじて避難したという状態で、亀井家も同様に書物、原稿など一切持ち出せず、お互い身体だけ無事を喜び合うのを幸いとしたり。火は早く黒門川を越えて荒戸町の中級士以上の屋敷群を焼き盡くしなほ福岡城内に飛び火する気配

が見え藩主は友泉亭別荘に避難という、福岡藩に未曾有の大火とされる。

昭陽夫妻は、結婚三年目で妻は臨月に近く姪浜の実家(早船家)に「お産帰り」をしており、火事に遠く離れていた。

同月十八日、長女「友(とも)」出産。後の少稜である。

日田の広瀬淡窓は、前年から亀井塾留学中で、淡窓自身は折良く帰省して火事は免れたが、淡窓の書物と諸品すべて焼亡している。

淡窓は師家の火災を知ると、急ぎ見舞金を用意して帰塾した。また淡窓による火災跡・実況の記録を次にする。

余、福岡ニ着シ、唐人町ニ至リシニ、学館ヨリシテ諸塾ニ至ルマデ、唯一片ノ赤地トナレリ。先生父子、正三瓦礫場中ニ於テ、席ヲ敷キ、朋友門生ト共ニ、痛飲シテアリシナリ。南冥ハ時ニ起ツテ舞ハレタリ。昭陽ハ己ニ酔臥セラレタリ。余ガ至ルヲ見テ、起座シ余ニ告ゲテノ玉ヒケルハ、我家一切蕩尽ス。子ガ旅装ノ塾ニ留メシモノモ、亦遺ルコトナシ。コレ恨ムベシ。但シ、老父ガ著述ハ、余炎火ヲ侵シテ之ヲ救ヒ得タリ。余ガ作ハ、マタ再ビスベシ。何ゾ深く恨ミンヤトノ玉ヘリ。(懐旧校筆記)

能古博物館だより

昭陽は、徳山からの入塾生を帰し、

これに役藍泉宛の救助を懇請する書面を託す。また、南冥に学んだ医学者と書生達の修了者たちにも救援を乞い、その内の富者およびその子弟には借入金を相談する書面を送った。

また、藩の罹災者に対する救済貸付金七拾四両を利用した。

こうして集まった資金の中で、見舞金などは別として借入金については、利息の高低、返済条件などを勘案して、当座の必要を除き、かなり纏まった金額を短期有利に運用するなど、これによって全体資金の効用を上手に高め、なお借入金返済は円滑に支障なく実行している。すべて昭陽の才覚か、早船、石橋家による協力か、わからないが、昭陽に金銭不信が生じなかったのは最善である。火災後の亀井塾は、昭陽が妻実家の離れ家(岳父の隠宅)を借用して再開、これに淡窓ら書生を移す。

また、父南冥の身柄を藩庁に届け出て、祖父が医業を開いていた姪浜の旧宅に父南冥を移す。これに藩も大火の後であり、昭陽の措置を認めた。昭陽が、火災後の亀井家再建など最も良き理解と協力を得ていた岳父(妻の父をいう)の正朝翁が、五月十四日に急逝する。いまの昭陽に最

大の痛恨事である。

なお、火災後の西学問所再建と復興について藩の対応は甚だ鈍い。このため西学教職者にも不安が生じていた。

六月、藩は西学問所の再建を不可とし、同校の廃校を決定。学生は東学問所に移籍。六月十六日、西学教職者は全員の儒業職を停止して、平士(一般士)に変替する旨の申渡しを受けた。これによって各人は諸組士に編入され、その組々の担当諸役に就かされることになった。

以上には、寛政二年に幕府が直轄する湯島聖堂の昌平校に朱子学以外の異学講義を禁止した措置(一般に、「寛政異学の禁」と呼ぶ)に福岡藩朱子学派の便乗がうかがえる。儒学者を平士にするなど徹底した敵意というほかはない。

昭陽は、城代組士として城内警備或は郡方下役を勤めながら、なお家塾による教育、また己れの研究と著述を続ける決心を強くした。

これらもあって昭陽は、寛政十一年三月、唐人町の火災跡に居宅と学舎を急造して、父母と己れの妻子、これに門弟たちも引き移った。しかし、この状態も一年余で終わる。

翌十二年元旦の夕刻、又々、付近

の商家から出火、これで昭陽の新築も無残に焼けた。

このため、昭陽は城下住まいに反省を持ち、郊外に出る決心をする。入手した土地は、西郊の海岸に近く、唐津街道を北に入り、なお川流(樋井川)を地形に利用でき百道(ももじ)松原を背後にする場所、

これに再度の建築に着手。この間、一年余は又々妻実家に仮寓する。同年夏、七月十四日、昭陽二女の「敬(たか)」出生。さながら母が実家帰りしてのお産にひとしい。早船家も当主の不幸がつづいたが、実母(えん)の気丈と使用人のまとまりが良く家業も繁盛している。

将来になるが、この二女「敬」は成長して実家に嫁して、祖母「えん」同様に家業を支えることになる。この四年、昭陽の著作はない。

寛政十三年は二月廿一日改元して享和となる。昭陽の再建は、同元年五月十五日百道砂丘の新屋敷地に完成。南面して遠く草ヶ江台地の森を眺め、東側は樋井川が境界となる。西と背後の北側は百道松原と呼ぶ松林に囲まれるという好適地である。

現在は早良区西新一丁目、今川橋畔の「福岡記念病院」が、亀井塾・

亀井屋敷跡とされる。

移転して父南冥と母は屋敷地内別棟の離れ屋とする。父も喜んで自らの居宅を草ヶ江亭と称する。内書生の寮も広い。母屋は、暫く時期をおいて増しを考える。

十一月、昭陽著『古序翼』成る。藩学出勤がなくなり、昭陽に余裕ができる。

享和二年八月廿五日、父の還暦祝宴を自宅に張る。遺憾ながら父罪科の身であるので一日の招客十名以内に別けて四日間及ぶ。幸い隣家の気づかいもなく、藩の看視もとどかない。同年、『字例述志』七巻五冊を脱稿する。

十二月、弟大年在結婚(妻は笠氏)姪浜の祖父旧居(忘機亭)に医を開業する。

次弟の雲来は、郊外「甘木」の星野陽秋に寄寓して医療を修業中。

陽秋は父南冥に専ら医術を学び、南冥に嘱望された優等生である。

翌三年、昭陽は、書齋を増築し甘菓居の室号を付ける。同年『尚書考』六卷三冊。次で、『穢文絮談』二巻。剥孟子一冊。等々を著作。

同年、城代組士として城内警衛の番役に就く。これは、足軽二名を従

能古博物館だより

え城内巡回する。終日、三交替制で翌日は休務となる。

いよいよ平土に編入された実務であるが、昭陽は謹直に勤める。

翌年二月、改元で文化となる。組士として、香椎宮に派遣の勅使警護に就き、同宮に参拝する。

この年、五子文評三冊。国語独了小冊を作文。

文化二年。昭陽、一昨年からの城内警衛士の交替期限が到来。組頭から再勤を要請されるが固辞して認められる。昭陽には支藩秋月侯との固い默契があり、これは本藩士として口外できないだけに昭陽は苦しいものがある。

九月十六日、昭陽、待望の男子出生。即ち、長男義一郎(後に蓬州と号す)である。

十月、秋月藩主「朝陽侯」に謁す。同侯内意により明年の江戸参勤に昭陽従行を伝えられた。かねて同藩の原古処から連絡されていたが、これによって、父南冥著「論語語由」を秋月藩本として江戸に於て出版が決定。このため昭陽に校正など重要を期す要務すべてを委任されるのである。

このほかに、同藩主の参勤往復に側近の好機会を与えられる。

昭陽、近来にない本望と幸福の極

みであり、心中、感涙にむせんだことであろう。

現在、本藩主は二代つづきの幼君のため、幕命による支藩主長舒公の後見職、また福岡藩に重要な長崎警固役も長舒公代番が続いている。

しかし、これによって本藩士の人事役職について可能にされるものではない。これらは、すべて本藩家老職評議によって決定される。

また、昭陽が支藩主の信認を表面にすることは、本人自身の自戒で厳しくする必要があるのである。

◎本誌面の昭陽詩の訓読と説明

百年無事石吁嗟  
物化如波人似砂

吾亦跳身天平去  
随君同摘日中華

(訓読)

百年、事無くば石も吁嗟す。物化は波の如く人は砂に似たり  
われ亦身を跳らして天平に去り  
君に随い同に日の中の華を摘まん

君に随い同に日の中の華を摘まん

○大火罹災に父を励ます昭陽詩書

百年無事石吁嗟  
物化如波人似砂  
吾亦跳身天平去  
随君同摘日中華

摘日中華  
去吳  
門廬  
寓水  
奉大  
藤下  
甘古  
公書

(訓読と説明は後文)

(意訳)

「百年も、なにごともなかったら、きつと石もあくびして声をあげるでしょう。」

物化(世のうつりかわり)は、打ちかえず波のようで、人間は砂のようなものでしょう。

されば、私も発憤、跳躍して俗界を飛び出し

父上と共に、文華の粋を得たいものです。

本誌につづく後文は「呉門を去り旧廬を得、柏水(姪浜の別名)に寓し、賦して大人(父をいう)膝下に奉呈す。甘古寓公書」

南冥と昭陽父子は、父南冥は幸いに昔の旧宅(父聽因の旧居)に、昭陽は妻実家の早船家の隠居家(甘古堂という)に、それぞれが姪浜に仮り住居している状況を云う。

とくに昭陽は、岳父(妻の父をいう)の甘古堂に住むので甘古寓公と称号したのである。こうした状況ですが、一詩を賦して父上に捧呈しますと、父の気持がなごむように表現している。よく、昭陽は詩よりも文が上手と聞かされているが、本詩の初め「百年、こと無くば石も吁嗟する」という名調など古文辞(徂徠学のこと)の達人とされるであろう。

原書(紙) 天地二八種(巻装) 左右三二七種

文化三年三月、かねて秋月藩主に昭陽と、同藩士の原古処に企画を命じられていた「西都雅集」と題した書画展が約一年余の準備を経て会場太宰府天満宮に開催された。

## よ り だ 博 物 館 古 能

出展は一人一作品、出展者総数は一〇一人、作品一〇一点で、内容は書六二、絵画三九点、これに自題水墨画を含む。応募者の地別は、地元

17 第 号  
な弾みになったであろう。

## 庄内藩の徂徠学大転向と水野元朗

『冬青』誌・坂本守正先生作・借文

前号で「寛政異学の禁」について

小文の解説と、幕府の措置に同調せず、依然として幕府の言う異学を立てた諸藩が多数。この中には徳川御三家の尾張・名古屋と紀州・和歌山両藩、これに譜代藩もとより外様藩

しかり、陽明学、古学、徂徠学を堂々と明治まで平然とたて通して微動もしていない藩名を実証にあげた。

これで、とくに興味をひくのは異学禁以前の享保年間に、従来の朱子学を、新しく抬頭した徂徠学との比較吟味に立って排除し、一藩あげて徂徠学となった出羽庄内藩がある。水野元朗という一藩士が藩の将来を考え、真善を求めて感慨を貫き、美事に成功するのである。

月刊誌を発行される坂本守正先生が、板橋館に於ける少栗に注目、とくに出品作

の「自題蘭石図」に最も心打たれる、と。これで遠く当館を訪問されて直接の御認識を承った。以来、今日に及ぶがこの間に『冬青』誌が山形県鶴岡（庄内とも呼ぶ）愛郷の誌であり、その歴史と近現代に心の通う文筆活動にひたすら御精進なさっていることも知る。とくに同誌連載の「庄内藩学の形成と致道館の教育（十五） 篇中の水野元朗伝(10)」は、毎号待望の記事であった。いよいよ、主人公の水野元朗が、長く救生徂徠に書簡で問いつづけながら第四十二信に至って、徂徠から納得を得る衝撃の一書が返えされる段に至っているのである。

少し脇道になるが、吉川弘文館の『国史大辞典』全十六巻、発刊六年ようやく最近完結。同辞典を索くと「水野元朗」（みずのもとあき）一六九二—一七八四 江戸時代中期の出羽国庄内藩士（中略）元朗は儒学者としての功績で有名で、はじめ朱子学を修めたが、のち徂徠に傾倒享保十年に板行した『徂徠先生答問書』上・中・下三巻の後半は、徂徠が元

朗の質問に答えたもの……とある。元朗は後に立身して家老となり治績をあげるが、その基は学問の回心（朱子学から徂徠学に転じたこと）であるとする。しかし、元朗が徂徠学を知ったのは己れ独り、江戸詰になつて同志の匹田進修を得る。その後、元朗ひとり帰藩すると、気のせいか色眼鏡で見られるようである。

一藩あげて朱子の流れを汲む山崎闇斎派の強い伝統を奉じている。元朗三十歳、藩政の刷新は学問の振興からと考えるが、語る同志もなく悶々とする。享保九年、ようやく同志進修が帰藩、これで元朗大いに勇気を得る。十一年頃になると徂徠学を選ぶ士、七、八人に増えた。これを、徂徠に奉じた文

一、此地家中一同は宋学にて拙者共両人計（ばかり）孤立仕候旨先達て申し上げ候所に近き比は漸々拙者ども同志の者七八人出来仕候 畢竟（ひっきょう）  
貴老様（徂徠のこと）御明徳の光被と大慶の余り 申上候  
この文は『答問書付巻』の第十三条に、元朗筆跡そのまま影印となる。もともと、水野・匹田両士は、それまでに頭脳に刷り込まれた朱子学を前提として、儒学の要訣を問う以

外になかったのも当然である。

徂徠はこれに対し、論理鋭く、その蒙を啓発しようとする。しかし、兩人は容易に先入観を改めることができない。『徂徠先生答問書』で水野元朗四十七通の徂徠書簡から成る第三十七信においても、両士はまだ「朱子の新注を除いては聖經の堂奥に入る方法がない」と、書き送る始末であった。

これがようやく終わりに近い第四十二信に至って、両士は核心を突く肝要の問いを発するに至るのである。即ち、先生が宋学を止めよと申される理由は、何か、と、迫るに至る。徂徠は「それは実によい質問だ」とばかりに、次の四つの理由をあげて答える。

- 一、読書の害 宋以前の古典を読まなくなる。
- 二、文章の害 宋儒の文章はリクツが多くて、『詩経』や漢唐の風雅を味得しえなくなる。
- 三、経学の害 宋儒は古代の書にない恣意の「性理説」を立て、経書を甚しく曲解している。
- 四、人柄が悪くなる 過度な道德至上論の宋学は、学生をコチコチの厳格主義に陥らせる。世間から「学問した人は人柄が悪い」とい

われるのはこのためだ。

徂徠はこれにつづけて、自主自発こそ学問の王道であり、学説は自身自身の判断で選べ、と両士にすすめる。朱子は自ら古来の経書を学んで独自の朱子学を樹立した。朱学の跡追いで宋学を学び、そのため朱子止りで、それより古へに遡らないのは怠慢だ。朱子と同じほど博く学んだ上でやはり朱子学の方がよいと納得したら、その時こそ朱子を信仰されるがよい。いま宋学が世間の主流をなしておるから学ぶというのでは、真に学問をする身として恥ずかしい。自分(徂徠)は誰にも頼らず、古聖人の書物に直に学ぶことを「専途」としているのだ、と。

この第四十二信こそ、それまでのモヤモヤが一気に吹っ切れ、両士に「なるほどさうだ」と肚の底から納得させた衝撃の一書、学問的「回心」を遂げさせた止めの一撃であった。これで心底から「徂徠こそ真理」と得心し、藩内にこれを押し広めるこそわれらが使命と、深く決意したと推定してよい。

これにつづく第四十三、四十七信は、回心後の両士が徂徠を唯一の師と仰いでいることをさながら示す。以後、徂徠の勧めに従って『詩経』、

『書経』、の会読、詩作や『楚辞』『国語』の学習を仲間とともに始めたことを報告し、最後の第四十七信は「弁通」と「弁名」入手の申し入れである。

まことに第四十二信は『答問書』の分水嶺であった。第一信から六、七年に及ぶ宮々とした道程の末、ついに「回心」の嶺に達した。

この後、両士は藩内に孤立しながら、これとは思う好学の士に働きかけて次第に同志を獲得しつつ、鋭意かつ着実に徂徠学の宣布に邁進する。

以上、説明の中で「徂徠先生答問書」が再三出ているので、この書物について、参考に述べておく。

江戸時代の和本(木版本ともいう)は、今日の写真に相当する技術を使っている。

例えば、本題に述べた水野元朗が萩生徂徠に出状した質問書は、そのまま「徂徠先生答問書」の出版元に渡される。これを木版づくりの彫師は真に迫る技術で木版に彫りつける。次に、徂徠先生の元朗宛て返書も同様にする。これで師弟問答の書簡が木版本に出来上がることになる。

中には、多忙な徂徠先生は、別に返書をせず、元朗からの質問状にそのまま回答要件を記入する。この場

合、そのままを版木に彫り込む。

書簡は、そのまま名宛人に送られて不都合はない。

今日、鶴岡市の旧庄内藩校「致道博物館」には、『徂徠先生答問書』の刊本下巻に採録される水野元朗の徂徠宛第三十五信から第四十七信までの十三通(執筆の最終は享保十年。末尾に「茂郷」の自署あり、が巻装で收藏される。この外、『答問集』刊本にならない水野元朗、匹田進修両士の質問状の上部欄外に萩生徂徠が朱筆の回答を書き、そのまま庄内に返送されたものは『答問書附巻』として「致道博物館」収蔵。

『冬書』の坂本先生は、徂徠は当時の一流書家であるが、この場合は巧く書こうという意識はさらになくひたすら真理を伝えようと一気呵成に、朱筆でのびのびと流れるような筆勢がよくあらわれている。机上の朱硯に水をたっぷり、一節書いては朱を含ませ、含ませてはまた書きながら見られるのである。まさに、近世書芸術の屈指の優品と確信する。ほぼ二七十年前に成ったこのような超一流の知的美的文化財をわが郷土がもつことを、われら後世に誇りにしたいと思うとされている。

# 儒医・星野陽秋作病案書

安 陪 光 正

## 久右衛門義敦

筑前三奈木（現在の甘木市三奈木）

のわが家の古文書整理中、私は一通の病案書を見出した。その文頭には「安部久右衛門君病案書以呈焉」とあり、文末に星野陽秋謹誌とあった。内容は久右衛門の病状診断と治療方針を示すもので、文の始めに甲子春二月二十有四日と書かれていた。わが祖先には、安陪久右衛門と同名の者が三代つづき、それぞれの死亡年月は、



安陪久右衛門義敦の墓

陽秋先生  
久右衛門の方は義敦とわかったが、医師星野陽秋の方がわからない。たまたま『朝倉郡郷土人物誌』をめぐっていたら、「調 黄溪・子紅景」の部に星野陽秋の名を見出して驚いた。それを引用すると、「調 黄溪、名は友、字は尚甫、筑前

久右衛門慶明 寛政九年十一月二日  
久右衛門義敦 文化二年十月十七日  
久右衛門慶達 天保四年十一月廿八日

となつている。死亡年月や甲子年から考えると、この甲子年は文化元年（一八〇四）で、久右衛門は義敦であることがわかった。すなわち病案書の作成は文化二年二月、久右衛門の死は、病案書作成後一年九か月であることが判明した。



星野陽秋居士の墓

銀杏黄葉  
その後私は、朝倉郡西入地に調氏の墓を尋ね、はじめて陽秋の墓前に詣ずることができた。墓地には二本の銀杏大樹が秋空にそびえ、陽秋以下代々の名医とし

上座郡入地村（今の朝倉郡大福村入地）に住し、五禽葬と稱す。筑後國妙見城主星野中務大輔調 胤實貳拾参世の遠裔星野陽秋の子元琳の養子にして、同苗武助の長男なり。其祖陽秋分家して医を創め令聞あり。養子元琳之を承け黄溪に至り三代目を亞ぎ、姓を調に復す。  
黄溪人となり忠信大志あり。年十六にして福岡藩龜井南冥先生の門に学び、刻苦勉強学業大いに成り、門下生四天王の稱あり。二十四歳にして医を四方に学び、三十五にして帰り父の業を亞ぐ」  
また、広瀬淡窓の『懐旧樓筆記、卷十』に南冥の六十歳の寿を賀するに際しての記事に、  
「南冥先生ノ誕辰ハ、八月二十五日ナリ。——中略——初日南冥ノ旧友会ス。第二日儒員会ス。其日南

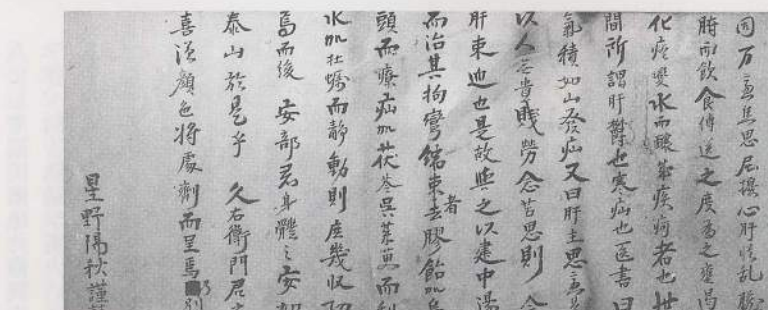
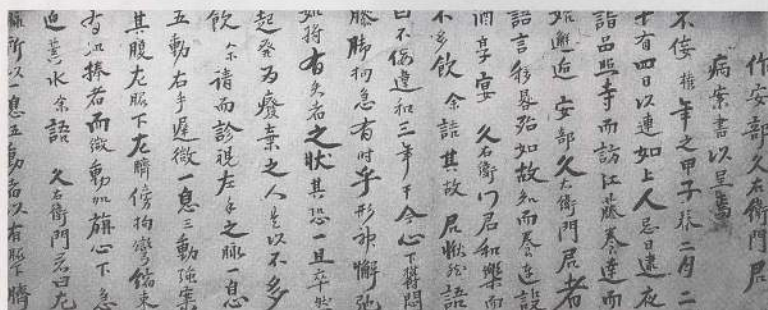
冥先生ヲ始メトシテ、列座ノ者九人ナリ。昭陽ヨリ預メ其席順ヲ定メラレタリ。其次第ハ、南冥ニ次テ原震平ナリ。次ハ江上源藏、次ハ後藤主税、次ハ星野陽秋、次ハ山口民平、次ハ余（広瀬淡窓）、次ハ昭陽、次ハ大壯、次ハ大年ナリ。其席順ヲ別タレシ趣意ヲ考フルニ、江上・山口・後藤ハ先輩ナレトモ、当時儒官ヲ止メタリ。當時秋月候本家ノ後見ニシテ、震平其教授トナリ名望極メテ重シ。故ニ先輩ナレトモ之ヲ冠トセラレタリ。山口ハ龜井三子ノ妹婿ナリ。故ニ其座ヲ退ケタリ。陽秋村医ナレトモ、南冥高足ノ弟子ニシテ徳望アリ、故ニ後藤ニ次ケリ。余ハ昭陽ノ門人ニシテ、先輩ニ後レタリ。故ニ賓客ニ次キ、家人ノ上ニ置カレタリ」とあって、陽秋が南冥門下の高足であることを知った。

て知られた元琳・桂洲・黄溪・紅景の墓にしきりに落葉を降らしていた。陽秋の墓は、散り敷く銀杏黄葉のしじまの中に立っていた。正面にただ陽秋居士とのみ刻り、左側面に文化甲子七月八日、右側に享齡五十三と読まれた。なお墓地内に亀井 鏡撰書の「調 黄溪碑」が建ち、碑文(原文漢文)に、

「信州多田源氏の裔なり。祖陽秋医を創む。考元淋、皆星野を以て姓とす。翁(黄溪)に至って旧に復して調氏を冒す。以下略」とあった。亀井 鏡は、昭陽の次男で陽洲と号し、兄蓬洲の夭折後家督をついだ人物である。

病案書から

病案書によると、陽秋が文化元年二月廿四日蓮如上人の忌日逮夜に三奈木の品照寺に詣で、寺の斜向いに住む医師江藤養達を尋ね、そこで久右衛門にめぐりあっている。養達は酒席を設けてもてなしたが、久右衛門は和楽して多くは飲まなかった。その理由をたずねると「三年来心身の違和感、時に心下部の鬱悶があり、或は急に脚がとまり、時に軽い意識障害を覚え、発作がおこって癱疾となるのではないかと恐れ、それで酒を



星野陽秋謹誌、安陪久右衛門君病案書

を処方し、安心せよと書いています。ここにおいて久右衛門君の喜び顔色にあふるとある。

おわりに

二百年前の病案書を前に、久右衛門義敦と星野陽秋、その師南冥先生のことの想いをはせた。患者と医師、この二人の苔むした墓に詣で、二人をつなぐ一通の病案書の不思議に想いを走せた。医師として数多くの人の死に接していると、人は生きてきたように死んでゆくことを知る。感謝して生きた人は感謝して死んでゆく。不平不満に生きた人は、不平不満の中に死んでゆく。

私の書齋には「福莫大於知足」の扁額をかかげる。彼らと同時代を生きた仙厓の書である。福は足るを知るより大なるはなし、物欲を少なくすれば、心の平安が得られるとの意味に解している。

久右衛門は黒田播磨の家臣、陽秋は南冥門下の高足、しかも村医として名聲の高かった人である。この二人がどんな生き方をし、どんな死に方をしたのかと昔の人に想いをめぐらした。そして今私は、病案書を前に自分がどんな死に方をするのかと、改めて考えさせられる。

飲まないのだ」と言うことであった。現症では左右の脈に差があり、腹部左側に拘攣縮束、棒の如きものありて微動すとある。久右衛門は当時七十歳を過ぎていたから、冠動脈硬化や狭心症様発作があって、不安鬱憂の状態にあったのだろう。病案書の中には、「君の病は万慮焦思し、



# 少栗母の手紙

少栗の母、もとより昭陽妻である。名は「いち」伊智に書かれることもある。

安永六(七七)年、筑前国早良郡姪浜村・早船正朔、えんの一男三女の末子に出生。亀井昭陽は四年早い同二年の生まれである。

早船家は、「五島屋」を称し、姓も屋号も海の商人そのもの。出身は西海の五島を本拠地にして、海産物を扱い、筑前海の浦々から内陸に流通させる小廻り回船業である。

こうした海の交易業者は、進歩と科学に富む、開けた気性が多い。早船家も、その通り開放的で明るい家風の伝統がある。

同家の縁者も多い。いちのすぐ姉は、姪浜の大庄屋で福岡藩米の廻船業の胴元、酒、醤油醸造も営む「紙屋」石橋家に嫁ぐ。その上が兄で後に家業を継ぐ。長姉は、城下唐人町の黒門橋際に『橋本屋』の屋号で質と両替を営業する上原家当主の妻。

いずれも町家ながら地元の名望家で知られる。両親は、いち結婚後に隠居、離れ家の甘古堂に移り自適する。

元々、早船家と亀井家は親の代に縁組み(南冥姉が早船正朔妻)して

おり、昭陽といち兩人はいと同志である。こうした縁故から夫昭陽は結婚する「いち」の教養など熟知しており、兩人とも多少の面識があった、と思われる。

本稿に再三登場を願う、西区今宿の亀井雷首・少栗の後嗣家には少栗母からの書簡が少栗宛十一通・夫婦源吾(号雷首)宛六通が伝えられている。

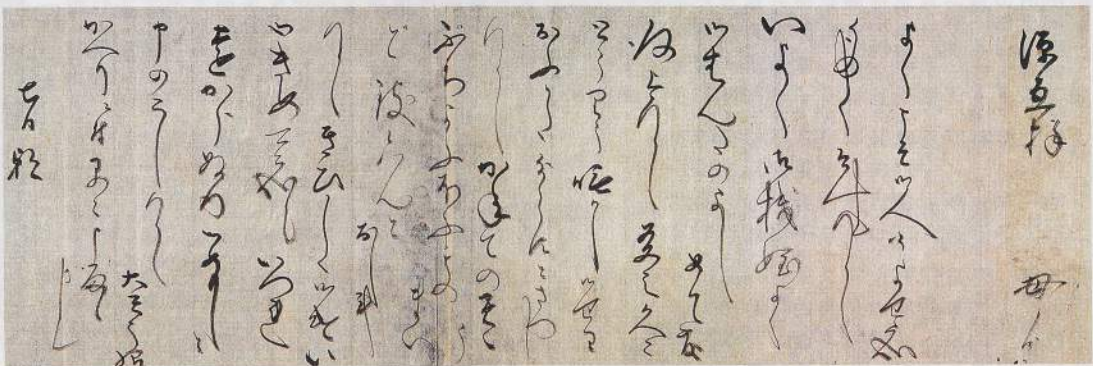
源吾については、母いちも兩人結婚以前から知っており、とくに源吾は十六歳から亀井塾の内書生、さらに兩人結婚後も共々、昭陽家に頻繁往来しており、さらに五年後は亀井家の同居家族となるなど、他人行儀のない間柄である。

ここでは、まず少栗母から源吾宛の手紙を見ることにする。

本題の少栗母手紙について、母は家事裏方に徹した様子がうかがえる。このため我々の表ばかり見た者には手紙の用件について、わからぬことが多々である。しかも文が簡潔で当事者だけに通じることになる。

いくら裏方といっても、昭陽の健康、人の出入り、内書生のこと、極めて多忙であったことは間違いない。

これを考えると、走筆で達文であった、と関心させられるのである。



源吾様 母より

よくこそ御人およせ成され  
おめでたく存上候  
いよいよ御機嫌よく  
御はんたのよし

めでたく

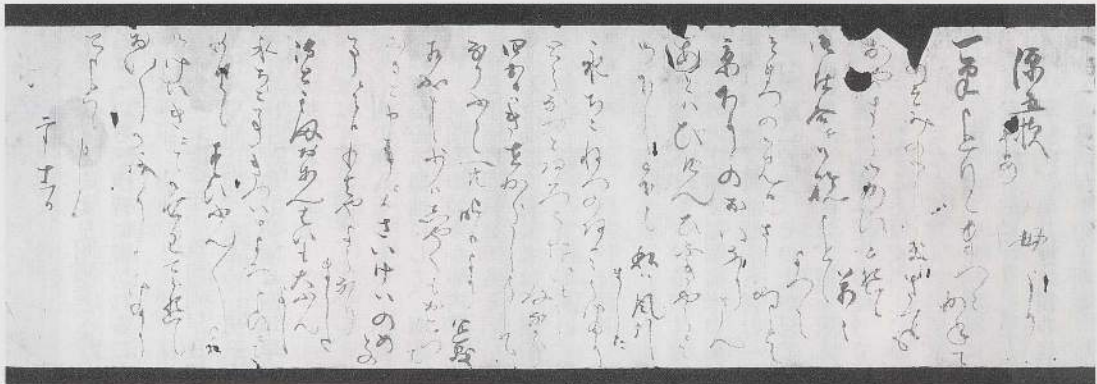
存じ上げ候 友之(少栗の名) 久々  
とうりう 嘸々(さぞさぞ) 御せわ  
おふかたならずと さっし  
候 かねてのそ、う  
ぶちようほふもの

まい

ど致し候わんとおしはかり (計はかり)  
申し候 きびしく 御遣い  
おきめ成さるべく候 いつれ  
遠からぬ内 御めもしと  
申しのこし候 大そう様  
かへりに付 早々申留候  
かしく

七日朝

(御末文の「大そう様」は、昭陽弟の大社のこと。本人が帰ると立ちかけているので、自分の手紙を打ち留めます、の意。



源吾様 母より

平安

一筆申上候 まつまつかねて  
おのそみの御しな さても  
おやす御かい被遊候

御仕合せ 御祝申上候

よつて  
そまつの御見廻し△△申候

京下りのおいなりさん  
あとほびけんひふきやうにて  
御下し被下候 私ほ風引

永ちこねつのあるとうけ給り  
どうなつとあろうたいとハ

存じながら  
四五日ハきをからしうして  
なり不申(申さず)候へ共

昨日より宜敷  
相成申候 少しはやくもおこつて  
おると申事二候 さいけいのめとの  
事にて候 もはやようなり

御ととさまおあんはいも大ふん  
よく

御座候 すいぶん  
御けいきにて御せわ可被遊候  
おい／＼御渡りうけ給り  
可申上候

かしく  
二月十二日

御ととさまおあんはいは、昭陽の御  
按配(体調のこと)が大分よろしい意

龜陽文庫・能古博物館友の会

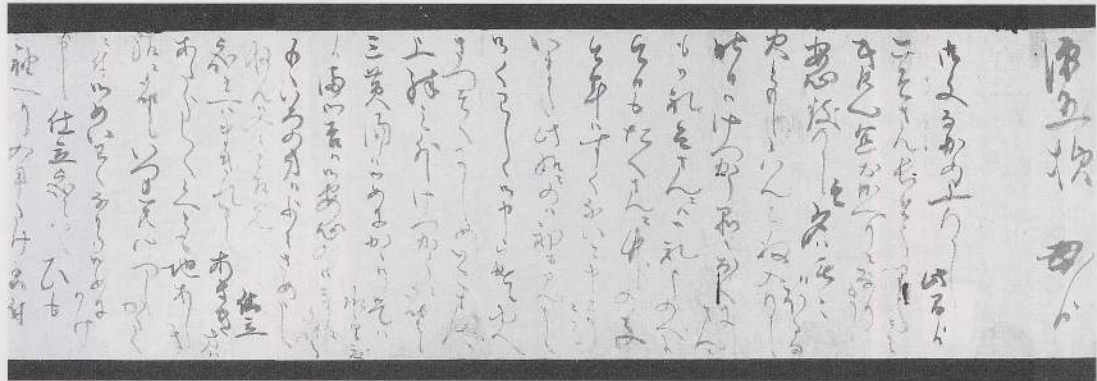
- 〔福岡市〕 天谷千香子③ 西嶋洋子③ 岡部六弥太③ 坂田泰滋③ 鬼塚義弘③ 村上靖朝③ 吉倉静江③ 星野万里子③ 小田一朗③ 片村雪江③ 尾井准輔③ 速水志兵衛③ 財部一雄③ 橋本敏夫③ 桑形シズエ③ 田上紀子③ 三宅碧子③ 安松勇一③ 高徹男③ 上田良一③ 西村忠行③ 宮浩二③ 山内重太郎③ 桑野次男③ 玉置貞正③ 片岡洋一③ 星野金子③ 石川文之③ 木戸龍一③ 中畑孝信③ 黒川邦彦③ 岩重二郎③ 西島道子③ 吉原湖水③ 原重則③ 石橋七郎③ 藤木充子③ 和田慎治③ 西川真澄③ 岡本金蔵③ 青柳繁樹③ 横山智一③ 末松仙太郎③ 板木継生③ 行成静子③ 池田邦夫③ 浦上健③ 宮崎 集③ 都筑久馬③ 吉村陽子③ 斎藤 拓③ 石橋観一③ 桃崎悦子③ 古野開也③ 西 正憲③ 林十九楼③ 大神敏子③ 安永友儀③ 磯崎啓子③ 若下須美子③ 土屋正直③ 三角健市③ 織田喜代治③ 西尾健治③ 上田博③ 伊藤康彦③ 石橋清助③ 塚本美和③ 長八重子③ 鶴田スミ子③ 黒川松陽③ 柳山美多恵③ 日野和子③ 岸 洋子③ 前田静子③ 田中和子③ 古賀清次③ 肥塚善和③ 寺岡秀實③ 隈田清次③ 野口 隆③ 奥田 稔③ 川島貞雄③ 長尾茂徳③ 松尾治郎③ 川島貞雄③ 井上敏枝③ 平河 涉③ 石村マツノ③ 藤野 幸子③ 富重芳子③ 葉山政志③ 藤野 玄③ 半田耕典③ 久芳正隆③ 藤野正稔③ 原口虎夫③ 吉富とき代③ 藤田満須美③ 野田はつ③ 大山宇一③ 児島順子③ 鶴田俊隆③ 丸尾好幸③ 荒巻重義③ 高木千寿丸③ 武藤紗智子③ 浜野信一郎③ 原 敬道③ 富藤瑞子③ 森 志げる③ 林 千代子③ 糸山好太郎③ 山口由利子③ 墨 羊子③ 〔前原市〕 由比章祐③ 〔大野城市〕 伊藤泰輔③ 田代直輝③ 〔執行敏彦〕 久藤敦子③ 山田 栄③ 〔春日市〕 後藤和子③

白水 都 (筑紫野市)

- 脇山涌一郎③ 川浪由紀子③ 原 富子③ 〔太宰府市〕 中村ひろえ③ 古賀謹二③ 佐々木謙③ 平岡 浩③ 西尾弘子③ 末松祐而③ 蔵田はつよ③ 〔筑紫郡〕 精城 慎也③ 〔柏屋郡〕 神崎憲五郎③ 橋田正己③ 柿田猶子③ 神井俊寿③ 松本雄一郎③ 青木良之助③ 友野 隆② 鈴木惠津子② 川原敏子③ 長崎 栄市 井手伽羅子② 〔宗像市〕 木村秀明③ 益尾天藏③ 〔甘木市〕 佐野 至③ 酒井カツヨ③ 具嶋菊乃③ 宮崎春夫③ 井手 太③ 富田英寿③ 田中トクエ③ 井上 清③ 〔朝倉郡〕 鬼丸雪山③ 山崎エツ子③ 〔飯塚市〕 小山元治③ 〔浮羽郡〕 吉瀬宗雄③ 〔大牟田市〕 嶽村 魁③ 古賀義朗③ 〔苅田町〕 木下 勤③ 〔北九州市〕 片桐三郎③ 平野 巖③ 〔筑後市〕 中島栄三郎③ 〔久留米市〕 庄野陽一③ 〔直方市〕 山本利行③ 〔大分県〕 寺川泰郎③ 田本政宏③ 〔熊本県〕 濱北哲郎③ 〔佐賀県〕 甲本達也③ 〔山口県〕 大塚博久③ 〔大阪府〕 小山 実美③ 前田敏也③ 〔大府〕 〔滋賀県〕 辻本雅史③ 〔愛知県〕 杉浦五郎③ 庄野健次③ 〔神奈川県〕 中野 曇子③ 林田 睦③ 〔東京都〕 片桐淳二③ 山根 貞与③ 村山吉廣② 田中加代③ 〔千葉県〕 森 久③ 〔埼玉県〕 問所ひさこ③ 〔石川県〕 丸橋秀雄② 〔宮城県〕 田中信彦③ 〔北海道〕 船越谷嘉一

【協賛会会員(個人)】

- 片桐寛子(福岡)③ 中村 登(福岡)③ 大里豊男(福岡)③ 広瀬 忠(福岡)③ 笠井徳三(福岡)③ 永田蘇水(福岡)③ 菅 直登(福岡)③ 大坪正治(福岡)③ 野口一雄(福岡)③ 奥村宏直(福岡)③ 荒木靖邦(福岡)③ 早船正夫(福岡)③ 安路光正(福岡)③ 浄満寺(福岡)③ 花田加代子(福岡)③ 梅田光治(福岡)③ 沖 双葉(福岡)③ 熊谷雅子(福岡)③



源吾様 母より

御文なかめ上候 此間より  
こそさん長とうりうにて  
きけん宜(よろしく) おかへりニ  
なりまし

安心致候 今夕ハ嘸々

火ともし候ハんと存入り候  
昨日ハけつかう品々おくにさんニ  
も御礼そさんニハ御礼申のへに  
今日もたくさんに竹の子  
今年ハすくないと申事にて

いまた此様ニのハ初而見申候  
御くわしく御申被遣(つかわされ) 候ゆへ  
さっそく にしめ ととさまニ  
上 殊之外けっこうニ御座候  
三黄湯ハ御めにかゝり是ハ承り度  
候 まつ吉ハ御安心の御事ニ御座候  
も、いろの方は少々さめ申候  
ねんハ入候と拜見申候 仕立  
被成(なされ) 候へハまきれ申候

あたらしく候へとも地あしき  
様ニ御座候 いづれ共けっしかたく  
ニ付御めいわくなから おめにつけ  
申し候 仕立被成(なされ) 候ハひも  
袖へり入用たけ書付(以下紙欠)

あさき方ハ

注)本行「行目」「こそさん長とうりう」は愛  
孫の「こそめ」をこそさんと呼ぶ。長逗留  
させた帰りにほたる籠に沢山持たせたので、  
今夕は:

注)三黄湯は、体格、体力、ともに充実の  
人が、のぼせ、便秘、不眠の特効漢方薬の  
こと。雷首から届いているが、対面して詳  
しく聞きたいとしている。

- 七熊澄子(福岡)③・上田 満(福岡)
- 木原敬吉(飯塚)③・大久保津夫(嘉穂)
- 庄野直彦(直方)③・原田國雄(宗像)
- 森光英子(久留米)・西喜代松(北九州市)
- 緒方益男(佐賀)③・中山重夫(唐津)③
- 七熊 正(佐世保)③・七熊太郎(佐世保)③
- 伊藤 茂(芦屋市)③・小堀定泰(滋賀)③
- 白水義晴(東京)③・西村俊隆(東京)③
- 江崎正直(千葉)・多々羅幸男(千葉)③
- 会員ご氏名に③は、会費ご継続三年目  
をいただいた名に④は、多々分分のみお払い込み、①は  
増口数ご負担を示します。

【協賛会会員および特別会員(法人)】

- 九州 電力 株・大野 茂(福岡)
- 株 新 出 光・出光 豊(福岡)
- 出光興産福岡支店・山本繁弘(福岡)
- 株 福岡中央銀行・山本敬一郎(福岡)
- 医療 南川 整形外科 病院・南川勝三(福岡)
- 法人 南川 外科 病院・白尾嘉弘(福岡)
- 日本製粉株福岡工場・白尾嘉弘(福岡)
- 福岡県警備業協会・村上五一(福岡)
- 流通 共 濟 株・花田積夫(福岡)
- タイム社印刷株・安部博満(福岡)
- 株 笠 組・笠 忠夫(福岡)
- 博多ちくわ 株 魚嘉 松尾嘉助(福岡)
- 権藤税理事務所・権藤成文(福岡)
- 協 通 配 送 株・今林 昇(福岡)
- 大牟田運送株・南誠次郎(福岡)
- 株 三島設計事務所・三島庄一(福岡)
- 日 西 物 流 株・原 重則(福岡)
- 西日本急送株・原 重則(福岡)
- 愛宕建設工業株・野村六郎(福岡)
- (有)愛光ビルサービス・野田和禧(福岡)
- (有)クリーン開発・野田和禧(福岡)
- 延 寿 産 業 (有)池田邦夫(福岡)
- 九州三菱そう自販株・宮崎慶一(福岡)
- (有)安河内商店・安河内紀男(福岡)
- 木原税理事務所・木原敬吾(飯塚)

※新規の御加入(先号以後、平成五年七  
月三十一日現在)は、右の地区ごとに  
記載いたしておりますので、何卒御芳  
名を御確認下さい。

# 能古博物館の会

協賛会(個人) 年間1万円  
〃 (法人) 年間3万円  
〔館維持、資料収集、施設整備等の資  
金援助を受ける〕  
納入方法 郵便振替 福岡3160970  
財団法人 能古博物館

右の会費受領は、その都度本誌に掲載、  
以後会費相当期間を名簿にします。

【お願い】ご送金は振替用紙(送料加入者  
負担)をご利用下さい。用紙はご連絡  
次第お送りします。

## 図書出版

### 『閨秀 亀井少梨伝』

詩、書、画の作品で仙厓の次に多  
いのが同時代の亀井少梨。しかも  
少梨には艶麗な漢詩の恋歌まであ  
る。これが同女の作か否か。これ  
に始まる探究の書である。

B5版・表紙布装美本  
限定一、〇〇〇部  
図録全カラー50頁・本文94頁  
直売価 三、〇〇〇円  
(送料 三二〇円)

寄付受領の明細

(絵画) 油彩50号「臼杵の石仏」  
昭和63年3月創元会展入選作  
寄付者 西区生ノ松原三二一五  
現創元会会員 原 友一様

(図書) 「日本史学年次別論文集」

一冊  
近世2 1991年  
発行所 学術文献刊行会  
発行 1993年5月  
寄付者 横濱市保土ヶ谷区  
上屋川526  
志村 翠様



「臼杵の石仏」タテ116.6cm・ヨコ92.5cm

編集後記

まず、本号の発刊が大変おくれま  
したことを深くお詫び申します。  
さて、本年の気候不順には、とま  
どいするばかりです。例年、海水浴

など夏レジャーの風景で溢れるので  
すが、ほとんど見られません。  
孔子聖廟の建築では、本体は出来  
上がりましたが、講堂ほか付属建物  
と造園植込みなど天候不順でサッパ

り手つかずです。皆様の御賛助と、  
今回初めて産業界各社に助成を要請  
しながら、予定の進行ができず残念  
であります。  
文庫聖廟を記念して、九大、教育  
大、西南大、福大の諸先生、これに  
文庫旧蔵の聖廟が世に出る機会を与  
えられた東京の翠川文字先生、また  
早稲田大学の村山吉廣先生と、実に  
三十余名の方々から、孔子と論語を  
主題に一般に読み易く、なお興味を  
もたれる御寄稿を、編輯は町田先生  
にお願ひしました。諸先生それぞれ  
に御専門の語り口からユニークな解  
説で現実・将来への提言もされると、  
思います。  
文庫聖廟が、まず地域に知られ、  
年々、春秋の積業(せきさい)を中  
心に諸催事を重ねる。お隣りの多久  
聖廟の提案通り、聖廟、聖堂めぐり  
の旅行者ツアーになる努力とサービ  
スをする。とかく曲りかけている政  
治と社会層に孔子と論語が、再認識  
されねばなりません。これは、多く  
の人々に語られています。こうした  
時節に聖廟、聖堂のあり方は甚だ有  
意義と思料します。  
次に、文庫聖堂では『論語』の読  
会と長期的継続を維持する。その詳  
細は、規約等によって定める。

文庫聖堂、恒例催事を立案、実施  
する。

(参考) 東京湯島聖堂では、毎年次  
の一般講座が実施されている。

1、論語素読(毎月次の第1日曜)  
(前期) 4月4、5月2、6月6、  
7月4、9月5

(後期) 1月3、1月7、1月5、  
1月1、2月6、3月6。受講  
料1回300円、年3、500円

○斯文会編「訓点論語」をテキスト  
に。前期は里仁第四、後期は郷  
党第十まで素読、必要に応じて郷  
解説を加える。

ほか、次の講座あり。漢文入門、  
史記講読、老子講読、孟子講読、論  
語講読、日数と費用も増加する。

・能古博物館ご案内・

開館 9:30~17:00 (入館16:30まで)  
休館日 毎週月曜  
(月曜日が祝日の場合は次の日)  
12月29日~1月2日  
入館料 大人300円・中高生200円  
交通 姪浜 能古行渡船場→フェリー(10分)  
→能古(徒歩5分)→博物館  
〒819 福岡市西区能古522-2  
☎(092) 883-2881・2887  
FAX(092) 883-2881